

『青に溶ける』 修正用

真ん中の長い方の線に沿って切って、短い線を本文が表に来るように山折して本の上部に引っ掛けてご使用ください。

(A6で作っているので少しはみ出すようになっています。気になる方はノド部分を調整していただくと読みやすくなると思います)

「ア、ス、だ、け、ど、見、た、目、は、ど、重、な、い、し、ら。彼、女、片、手、で、そ、え、を、抱、え、な、か、が、下、に、脱、着、を、脱、ぎ、たい。」

「彼、女、は、リ、ュ、ウ、ク、ン、カ、ラ、切、り、出、し、た。セ、ル、を、取、る、の、通、り、赤、ん、坊、く、い、ら、い、の、サ、」

「一番、何であつたか、見た中から、聲を聞き出す彼の瞳は、奇妙な少くは違つた輝きを湛えてゐる。」

[illegible]

てから、恐る恐る言つた様子で、僕の手を握んだ。

安心させるような声を意識して言えよ、彼女は何度か手を引込め、しほらしく

「さういふふうで」

32

彼女の小さな声は、闇に吸い込まれそうになりながらも僕の耳に届いた。少し迷つてから昔のことをかいつまんで話すことにした。微かに残る両親から愛してもらつていた時の記憶。数

「母さんと言ひ合いになつて家を飛び出した時に、死んでやろうと思つて海まで走つたんだ」

吐き氣と目眩をもたらずグラスをかなぐり捨てて乗り越えた防波堤。視界いっぱいには広がる白と黒。漆黒の真ん中に浮かぶ月。空を見上げれば満点の星空が広がっていた。

「あまりに綺麗だったから、何もかも忘れて裸足で家に駆け戻ったよ」
「まあ、家に帰ったら母さんはいなくなっていたんだけど」

目を細めてあの日の光景に思いを馳せる。記憶の中の海はいつまでも美しかった。

「素敵だね」

口を挟むことなく最後まで聞いてくれた彼女の声はとても優しくかった。穏やかな笑顔を浮かべているのだと、顔を見なくても分かるくらい柔らかくて、心に染み入るような暖かさがある。何故だか、無性に泣きたくなった。

防波堤の周りに人がいないことを確認して立ち止まる。

話をするなら、弔うという言葉は人間に限定されるみたいだし」

「身勝手だよ、人間って」

僕が言い終わると同時に彼女は声を震わせた。そうかもしれないと僕は曖昧に頷く。泣き出しそうな彼女は一瞬こちらを睨み上げて、それから自分の手の甲つねった。深呼吸を繰り返してから再び合つた目は潤んでいた。

「……えつと、ごめんね。こんなことを言いたかったわけじゃないの」

僕は赤くなつた一点を見つめたまま、答えを無理強いする気はないんだけど、と前置きして尋ねる。

「どうしてその死体を捨てようと思ったの」

——君はどうして、その話を親しくもない僕にしたの？

彼女は、日浦 心を胸に手を当ててそつと目を閉じる。その姿は何か神聖なものに祈りを捧げているようだった。

「花壇に蛾の死骸を埋める君を見て、思つたの。君なら答えをくれるつて」

だから、お礼が言いたかったの。本当にありがとう。

膝丈くらいのスカートが風を孕んで膨らむ。彼女は慌ててはためかないように手で押さえて、それから気恥ずかしそうに微笑んだ。流石に一瞬視界に入つた何かを指摘するほど野暮な人間ではないので、僕はまた明日と小さく手を振つておいた。

0:

3

2.

「囁くような声に僕の心がざわりと波立つ。血が身体中を駆け巡って目の奥が熱くなった。（間違ひなく、僕は今生きている）久しぶりに生を自覺して、僕は海に視線を落として表情を緩めた。君とここに來てよかつた」

發した言葉はすぐに波に飲まれてしまつたけれど、彼女にはちゃんと届いたらしい。「わたしも。……また、今度は大人になつたら來ようね」

日浦さんは、弾んだ声で応えた。

「——ごめんね。それから、ありがとう。」
小学生の時に作った有機プラスチック製のロボット。初めてのともだちだったのだと彼女は自嘲気味に笑う。
「昔から引つ越しが多くて、なかなか友だちができなかつた時に、お父さんが自由研究用の製作キットをくれて。それで作ったのがこの子なの」
だけど、学校で人ともめちやつた時にこの子に当たつちやつて。古い型だったからパーツももう売つてなくて、色々勉強して頑張つて修理したんだけど直せなくて。
「ひどいよね、本当に。なんて自分勝手なんだろう」
なんて返せばいいのかわからなくて、僕は缶んだ月を見つめていた。彼女の友人が安らかに眠れたらいいなと心から思つた。
彼女は砂をかき分け、静かにそこにカプセルを沈める。
「さようなら」

——生まれ変わったら、どうか幸せに。

默禱を捧げてから立ち上がった彼女は、とても晴れやかな顔をしているように見えた。

「内緒」と思つた。彼女はいくら成功した子とでも笑う。その姿が純粹に、綺麗だ。

「君は……ちやんこ見つかつた？」

「美性こそを知らぬ人間に、飛龍な話をもちかけてきた君が面白かつたから？」

「だか僕は、うしろから笑つてゐた。」

[illegible]

む青色は、記憶にあらぬところでも懐かしいもののように思えた。

「そ、う、う、い、い、や、う、う、行、て、く、た、れ、の。」

——大切な場所なんですよ。

星空を見上げたままだ浜に座り込むうう。彼女の顔を一瞥して、僕も空を見る。世界を包み込